

備前国浦上宗景の権力構造

渡 邊 大 門

一 はじめに

近年、岡山地域の戦国史研究が盛んになり、続々と成果が発表されている。一つ一つの論文は敢えて掲出しないが、とりわけ浦上氏・宇喜多氏の研究は、活況を呈しているといえよう。それらの成果は、主に『岡山地方史研究』『年報赤松氏研究』に発表されている。⁽¹⁾

備前国で宇喜多氏と並び称されるのが、浦上氏である。浦上氏はもともと播磨国浦上荘の出身と考えられ、代々赤松氏の配下にあつて、奉行人等を務めてきた一族である。応仁の乱を境にして浦上則宗が台頭し、単に赤松氏内部に止まらず、室町幕府の重鎮としても活躍している。則宗と同様に、その子村宗も赤松氏内部で重きを置かれたが、やがて当主である赤松義村を打倒し、播磨・備前・美作に覇権を築いた。⁽²⁾しかし、村宗の時代はそう長く続かず、享祿四年（一五三一）に尼崎大物で義村の子息政村（後の晴政）に討ち取られている。以上の浦上氏の動向に關しては、註（2）（3）で掲出した浦上氏の研究に詳しい。

さて、本稿で検討するのは、備前国に本拠を築いた浦上宗景の権力構造である。宗景は村宗の次男といわれており、その活動は十六世紀の半ば頃から確認することができる。戦国期に活躍した武将として知名度は高いと思うが、史料の制約があつて、研究はそんなに多いとはいえない。そのような乏しい研究状況で注目されるのは、寺尾克成

と畑和良の研究である。⁽⁴⁾次に、その研究概要に触れることとしたい。

まず、寺尾の研究は、備前国に覇権を確立した宗景を、単に父村宗の跡を継いだだけの守護代とみなさず、新興大名として位置付けている。宇喜多直家との関係については、直家を一外様国人とし、宗景家臣団の一員としてみなしていない。ただし、宇喜多氏は浦上氏西進の前線に立たされ、軍事指揮権の中に包摂されるとしている。寺尾の研究は、副題に「宇喜多氏研究の前提」とあるように、宇喜多氏研究の前提として浦上宗景権力の分析を行ったものである。随所に卓見が提示されているが、宗景権力の規定が十分になされておらず、やや物足りない側面があるのも事実である。

また、畑の研究は、宗景が守護赤松氏権力の代行者・保護者として、赤松氏旧領国の実質的掌握を狙ったと指摘した。そして、宗景は幕府―守護体制の規定を受けつつも、大名権力としての自立を志向したと述べている。畑の研究では、史料を丹念に博搜し、政治的な動向を調べあげており、浦上氏を室町幕府―守護体制そして赤松氏の守護権力と関連付けた点に特色があるといえよう。しかし一方で、当時明らかに弱体化していた、室町幕府―守護体制そして赤松氏の権力に依拠したとの指摘には、やや疑問が残る。改めて、宗景独自の権力構造を分析する必要性を感じるところである。

いずれの研究も貴重なものではあるが、残念ながら家臣団については、触れるところが少ない。⁽⁵⁾そして、宗景独自の権力構造という点においても、不十分な印象を受けるところである。その大きな理由は、やはり史料の僅少さに集約されるところであろう。端的に言えば、浦上氏の家臣の動向あるいは浦上氏権力を示す史料は大変乏しく、その実態をうかがうことは極めて困難である。そこで、本稿ではそのような制約があるものの、乏しい史料をできるだけ博搜し、主に浦上宗景の権力構造の基盤を成す家臣団やその関係について、検討を加えることとしたい。そして、宗景固有の権力構造を提示し、その特色を述べることにする。

二 宗景家臣の構成員

最初に、宗景家臣の構成員について、考えることにしたい。既に、寺尾註(4)論文で指摘があるように、宗景家臣団の記述は「備前軍記」などの後世の編纂物に見出すことができる。⁽⁶⁾宗景が播磨国室津を脱出し、備前国天神山に移った際、「大田原与惣左衛門」「日笠次郎兵衛」「延原弾正」「明石飛驒」「岡本太郎左衛門」「服部備前」の六人が宗景を守っているのである。「備前軍記」は後世に編纂したものであり、利用に際して注意を要するところであるが、この記述を裏付ける史料がある。

片上・浦伊部堺目相論之事、両方共雖有存分之、各令檢知、相定上者、

互無異儀、可被成其心得事簡要候、^(肝)

一 嶺者限尻無尾、限麓者谷尻、南者浦伊部可有進退、北者片上可有進退、

一 自海南之山者、浦伊部ニ可有進退、

右此旨令違犯者、忽可有御成敗者也、

永禄十壹年六月朔日

大田原與三左衛門尉

長時(花押)

服部備後守

久家(花押)

岡本太郎左衛門尉

氏秀(花押)

日笠次郎兵衛尉

頼房（花押）

明石飛彈守^(驛)

行雄（花押）

延原彈正忠

景能（花押）

片上年寄中

浦伊部年寄中⁽⁷⁾

この史料は、備前国の片上・浦伊部（ともに岡山県備前市）の堺相論について、延原景能以下六名が裁定を下したものである。「両方共雖有存分之、各令檢知」とあるように、片上・浦伊部の言い分や現状調査を行って、「相定」めた裁定であった。しかも、「右此旨令違犯者、忽可有御成敗者也」とあることから、一定の強制力を持ちえたものと考えられる。書止文言を見る限り、特に宗景の意を奉じような奉書文言が見られない。しかし、この史料に署名したメンバーは、後述するとおり宗景の家臣とみなしてよいであろう。それぞれの構成員について、寺尾註（4）論文を参考にして、その出自を確認しておきたい。

①大田原與三左衛門尉長時

大田原氏は、他の一次史料による確認が困難であるが、現在の岡山県和気郡和気町大田原を本拠とする領主であったといわれている。加えて、十五世紀の末頃には、延原氏とともに備前国守護代浦上基景の被官人であったことも指摘されている。⁽⁸⁾したがって、大田原氏はかなり早い段階から、浦上氏の配下にあったことを確認できる。また、大田原の近くには吉井川が流れ、新田荘という荘園があった。大田原氏は交通の要衝地を本拠とした、有力な領主であったと考えられている。

②服部備後守久家

服部氏に関しては、現在の岡山県瀬戸内市長船町服部を本拠とする領主であると考えられている。古代・中世には、服部郷として見え、また近隣には福岡荘が所在していた。大田原と同じく、近くには吉井川が流れ、交通の要衝であったと考えられる。『吾妻鏡』宝治二年（一二四八）八月十日条には、「備前国住人服部左衛門六郎」の名を確認することができる。同条によると、服部左衛門六郎は、御所中への奉公を願い出ているのである。その父祖はかつて源義経に従い、平家討伐に向かったと記されている。奉公を申し出たのは、その給恩に報いるためであった。服部氏は、備前国における古くからの在地領主であったと考えられる。さらに、服部氏は別の史料に、「先日宗景より使者、姫路をハ服部備後守と申つる」とあることから、宗景の奏者を務めていたことが明らかである。^②

③岡本太郎左衛門尉氏秀

寺尾註（4）論文によると、岡本氏は『姓氏家系大事典』に基づき、美作国東北部（勝北郡・吉野郡）を本拠とする国人ではないかと指摘している。次節で触れるが、岡本氏は美作国で活動していたことが確認でき、有力な説といえよう。また、現在の岡山県津山市加茂町には、確かに岡本という地名があるので、美作国出身の可能性は高いといえる。なお、岡本氏に関しては、後述することとしたい。

④日笠次郎兵衛尉頼房

日笠氏は、宗景家臣の中で比較的一次史料に恵まれている。日笠氏は、現在の岡山県和気郡和気町日笠を本拠とした領主である。やはり、大田原と同様に、近くには吉井川が流れており、日笠荘が所在していた。日笠氏は交通の要衝地を基盤とした、領主だったのである。なお、日笠氏についても、後述することとしたい。

⑤明石飛驒守行雄

明石氏に関しては、現在の兵庫県明石市を出自とする赤松氏の配下にあつた明石氏が存在した。そして、寺尾註

(4)論文では、宗景の代には、天神山城の南方に位置する、保木城主であったと指摘している。その出自に関しては不明な点があるものの、現在の岡山県備前市片上の片上湾に面した地名には、「明石」が存在する。そうすると、明石氏は片上湾を活用した、海上交通を基盤とした領主であった可能性もある。

⑥延原弾正忠景能

延原氏については、現在の岡山県和気郡和気町延原を本拠とした領主であると考えられている。他の領主と同様に、本拠の近くには吉井川が流れており、交通の要衝地を基盤としていたのである。そして、延原氏の場合は、名前の一字に宗景の「景」を使用しており、奥に署判を加えていることから、宗景にもつと重用されたと推測される。そもそも、浦上宗景の本拠である天神山城は、現在の岡山県和気郡和気町の吉井川に面したところに位置していた。そのような点を考慮すれば、寺尾註(4)論文が指摘するように、彼らは備前国東部の吉井川流域沿いに本拠を構えていたといえる。しかし、彼らは宗景の家臣団といえるのであろうか。先の史料を見る限りにおいては、宗景の袖判があるわけでもなく、奉書文言によりその意を奉じた形跡は見えない。彼らの実名を一覧すると、延原景能を除くと、宗景の「景」を使用していないことに気付く。通常、家臣は当主から名前の一字を与えられることによつて、一層強い紐帯を結んだといわれている。となると、宗景と彼らとの間には、強い主従関係がなかったと推測されるのである。

むしろ、彼ら中小領主は宗景を盟主として擁し、吉井川や片上湾における経済的な権益を保持するために、結合したと考えられる。六人も署判を加えているのは、盟主である宗景のもつとで、彼らが合議を行った結果であり、全員の総意を示したものと解される。総意を束ねた中小領主の筆頭というべき存在が、延原氏であった。したがって、この六人は宗景の家中に取り込まれた家臣というよりも、緩やかな連携のもとで、従属する位置にあったと考えられる。ちなみに、吉井川をさらに下っていくと、宇喜多氏が本拠とする金岡荘が所在し、児島湾へとたどり着く。

後に、浦上氏と宇喜多氏が反目した背景には、史料的な裏付けには乏しいものの、領域を接した経済圏をめぐる問題も介在したと推測される。

こうした、経済的な利益というものは、中小領主のそれぞれが個々に守るのではなく、有力者を盟主と仰ぎ一致団結する必要があった。そして、その支配領域を徐々に広げる点に、本質的なものがあつたと考えられる。便宜的に家臣団という言葉を使用しているが、厳密には同盟者と見る方が自然であろう。そして、先の史料を補うように存在するのが、次のものである。

尚々、室・那波出入事、時分柄候条、先無事之御心遣肝要候、尚万々任口上候、

室・那波^(勝平)傍尔相論候事、於在様者、追而被相究可被申付分候条、被成其御心得、那波村儀も無異儀様可被仰付候、龍野へも右之趣申上候、室へも使者差上、手前致無事候へと申聞候之間、被成其意、双方無為之御賢慮肝心候、恐惶謹言、

元亀二年

小嶋左馬允

六月十九日

一頼判

日笠次郎兵衛尉

頼房判

明石飛^(彈)彈守

行雄判

万福寺

まいる 御同宿⁽¹⁰⁾中

この史料は、現在の兵庫県たつの市の室と相生市的那波における傍示相論に関するものである。この史料による

と相論解決には至っていないが、「追而被相究可被申付分候条」とあるように、今後糾明がなされることを約束している。この事案に関しては、龍野（＝龍野赤松氏）と一方の当事者である室にも、伝えられたようである。なお、宛先の万福寺は、那波に所在した寺院である。署判を加えた一人の小嶋氏に関しては、不明な人物であるが、現在の兵庫県赤穂市に小島の地名があり、同所を出自とする可能性が高い。また、「上月文書」中の宗景の書状には、小嶋氏が奏者として見えている。^⑪ 明石、日笠、小嶋の各氏は、浦上氏の西進の過程において、西播磨の支配を担当したものと推測される。

浦上氏が播磨国西部を支配したという点に関しては、史料的な裏付けが乏しく、実態がわかりづらいのが現状である。註（８）で触れた「天神山城主浦上宗景武鑑」という後世の史料があり、浦上氏が西播磨に家臣らの知行地を設定したような印象を受ける。ただし、その記述には年代的な矛盾や誤りもあり、にわかに信用しがたい。ただ、浦上氏が三木衆（＝別所氏）と国衙表（＝姫路市）で交戦したことは、一次史料により明らかである。^⑫ そのような事実を踏まえるならば、西進の過程で宗景の勢力が那波周辺に築かれたとしても不思議ではない。恐らくは、彼ら中小領主の知行地も、播磨国西部に付与されたものと想定される。それゆえ、彼ら三名は宗景に従い、西進したのであろう。

こうした宗景配下における領主間の結合に関しては、個々の領主の動向が多くの場合不明であるため、実態がわかりづらい。また、彼ら同盟者というべき者が発給した文書は、宗景の意を奉じた形跡が見出しがたい。したがって、宗景と彼ら領主間の関係については、さらに検討を要するところである。その点に関しては、比較的史料に恵まれた日笠氏と岡本氏の動向を分析することにより、ある程度の解明が可能であると思われる。次に、検討を行うこととしたい。

三 岡本氏・日笠氏の存在形態

① 岡本氏の存在形態

前節において、岡本氏が美作国と縁が深いと記したが、その事実から検討を進めることとしたい。まず、次に二点史料を掲出する。

〔史料1〕

村宗以来入魂之筋目、岡本太郎左衛門方より相達候、祝着候、此節御馳走肝要候、恩賞必可相計候、恐々謹言、
(浦上)
(氏秀)

八月六日

(浦上)
宗景

難波孫左衛門殿⁽¹³⁾

〔史料2〕

御神文之儀宗景祝着被申候、如御望一行相調進之候、誠ニ以此節之儀御馳走肝要ニ候、我等聊不可有存疎意候、委細石源可被申候、恐々謹言、
(浦上)
(石川源助)

八月六日

(岡本)
岡太

氏秀

難波孫左衛門殿⁽¹⁴⁾

史料1は、「村宗以来入魂之筋目」が岡本氏秀から宗景に達せられたことを喜んでおり、宗景が「御馳走」が「肝要」であること、そして恩賞を計らうことを難波氏に約束している。宛先の難波氏は、美作国東部の有力な領

主の一人であり、宗景に味方することを申し入れたのである。時期は不明であるが、美作東部は尼子晴久・浦上政宗と美作国の有力な領主江見氏などが勢力を築いていた。宗景は彼らと対決するために、味方を募っていたのであろう。難波氏は、それに応えたものと考えられる。

史料2は、岡本氏秀の副状である。先の宗景の内書には、「委細某」という副状添付を示す独特の文言が見当たらない。しかし、史料1と同月日の日付でもあり、史料2は内容的にも副状と考えてよい。冒頭の「御神文」とは、難波氏が宗景に差し入れた誓紙に近いものと考えられる。そして、氏秀は難波氏の望みに応え、宗景の内書を調えたのである。後半の内容は、宗景の内書とほぼ同じであるが、後述するとおり「石源（＝石川源助）」の箇所が目される。また、宗景はこの難波氏の事例のように、中小領主に神文（＝誓紙）を提出させることにより、同盟関係を築いたと推測される。

では、「石源」とは、誰のことなのか。この「石源」とは、石川源助のことと考えられる。石川氏といえば、備中国の石川氏が有名であるが、この場合は明らかに該当しない。石川源助は、宗景から天正二年（一五七四）九月と十月にそれぞれ美作国飯岡郷と豊田荘を宛行われている¹⁵。そのような事実を踏まえるならば、石川氏は美作国に本拠を持った領主と考えるべきであろう。つまり、宗景は氏秀を通して、難波氏そして石川氏と結んだことが想定される。岡本氏は、宗景の美作国における重要な存在であった。

このように、宗景のもとで、氏秀が美作国の拠点となった例は、他にも確認することができる。

^(三浦) 貞広当知行分所々段銭之事、有尚^(改)春裁判、為公用百貫文毎年可有進納候、自然於無沙汰者、不可有其曲候、恐々謹言、

元亀貳

浦上

拾貳月廿六日

宗景（花押）

（尚春）
牧兵庫助殿¹⁶

この史料は、宗景が美作国西部に本拠を置く三浦貞広の家臣牧尚春に対し、尚春の裁判（宰判）により、公用百貫文の上納を命じたものである。この史料には、同じく牧尚春に宛てた関連文書がある。¹⁷その関連文書によると、宗景の書状の文体は、「岡本如何候て可然候はん由申候て、認被申候間、定可応貴意候哉」とあるように、岡本氏秀が原案を作成したものであった。しかも、貴意（＝尚春の意向）を十分に踏まえたものである。そして、引き続き尚春に対し、春三〇貫文、秋七〇貫文の段銭の進納を求めているのである。この一連の事例からすれば、岡本氏は同盟者という中であって、美作地域を統括する重要な地位にあったことを改めて確認することができる。

②日笠氏の存在形態

前節において、日笠氏は岡山県和気郡和気町日笠を本拠としたと述べたが、宗景の居城天神山城との距離も近く、後述のとおり永禄四年（一五六一）にはその関係を認めることができる。次に、関連する史料を掲出し、検討を行うこととしたい。

その舞台になるのは、備前国佐井田荘である。佐井田荘は、現在の岡山県瀬戸内市に所在した石清水八幡宮領荘園である。永禄年間に比定される史料によると、佐井田荘の進止権をめぐることは、田中坊と橘本坊が争っていたことが判明する。¹⁸田中坊の主張によると、橘本坊が買得と号して違乱に及んでいるという。田中坊では、「相伝証文」があるならば、そのうえで「異見」するように申し入れたが、ついに証文は出てこなかった。そこで、佐井田荘は本来田中坊が進止すべきことを、宗景に理解して欲しい旨を申し入れているのである。

年末詳ながら、五月には同趣旨の山上執行連署書状が宗景に宛てられている。¹⁹そちらの文言は、「可被任彼催促事肝要候」となっており、田中坊が佐井田荘を進止すべきことについて、宗景の助力を強く求めているのである。

この一連の流れから、当該地域の権力者として宗景の立場が認められており、石清水八幡宮内部で解決できない事態の收拾を宗景に委ねていることがわかる。

「永四」^(八書)

日笠次郎兵衛尉

最勝院尊報

頼房」

猶々思召寄拙者方迄、□輪并鞞被懸御意候、御懇之至難申盡候、急度愛宕へ人差登候條、其刻御禮可申入候、次御使僧長々逗留之處、折節手前取乱諸事無沙汰、失面目候、尚重而可申入候條、不能一二候、

貴札拜見、畏悦之至候、仍祭之御馬被成御下段、宗景満悦被申候、^(浦上)委細御報被申入候、将亦佐井田庄御公用之竹、當年一廉可被申付處、委曲御使僧へ如申入、彼是出入候之條、先少分二候へ共、被申付候、於趣者從河本方可被申上候、尚御使僧江申入候之條閣筆候、恐惶謹言、

十一月六日
(永禄四年カ)

頼房(花押)
(日笠)

最勝院尊報

この史料は、まず石清水社から「祭之御馬」が下され、宗景が大変喜んでいることを伝えている。そして、「佐井田庄御公用之竹」を「當年一廉」申し付けたが、「彼是出入」があつたため、まず少しの分だけを申し付けたと記されている。つまり、この史料からは、頼房が宗景の意を伝えていることより、宗景の配下にあつたと考えてよいであろう。そして、宗景は佐井田庄の代官職を獲得したと考えられ、公用を納入しなければならなかつたのである。史料の末尾に「從河本方可被申上候」とあり、河本氏が関係していることもうかがえる。年末詳ながら、十一月晦日の河本次郎太郎の書状があり、毎年千疋を納入する決まりになつていたことがわかる。⁽²¹⁾しかし、史料中に「国錯乱付而在所退転候條」とあるように、公用は納められなかつた。

公用が納められないという状態は、以後もたびたび続くことになる。年末詳の日笠頼房の書状によると、「千天」

のために公用を納められないと記されている。⁽²²⁾ また、同じく年末詳の河本次郎太郎の書状では、「一圓水損」のため、百姓が困惑しているという。⁽²³⁾ しかし、宗景が堅く申し付けたため、半分の五百疋を納入することとなった。この一連のわずかな史料を除くと、佐井田荘と宗景らとの関係は見られなくなる。

恐らく宗景は、備前国東部を中心に勢力を広げる中で、石清水八幡宮から信頼を勝ち取ったのであろう。その支配力を背景として、佐井田荘代官職を獲得したと思われる。そして、その運用に際しては、日笠氏、河本氏らの周辺領主を活用した。彼らには、宗景の得分の中から、一定の額が与えられたと推測される。このように利権を求める周辺領主は、宗景を必然的に盟主として仰がざるを得なかったと考えることができる。次に、宗景と日笠氏との関係を示す史料を掲出する。

〔史料1〕

去十二日於日笠青山之下、覃合戦候処、従後競懸射鏑脇之高名無比匹、^(「比類」カ) 恩賞必可相計候、恐々謹言、

四月十四日

宗景^(浦上) (花押影)

日笠牛介殿⁽²⁴⁾

〔史料2〕

去十二日於日笠青山之下、及合戦、令分捕、高名無比類、恩賞必可相計候、恐々謹言、

四月十四日

宗景^(浦上) (花押影)^(十)
日笠助拾郎殿⁽²⁵⁾

〔史料3〕

今度於「日笠」脱カ 青山之下、及合戦、原助一郎被討捕、粉骨無比類候、然者以新知之内三町分、於日笠田

皇三段之通、令合力候、何茂一廉可褒美候条、弥被抽忠儀事肝要候、恐々謹言、

次郎兵衛尉^{日笠}

四月十五日

頼房

日笠助十郎殿²⁶

この三つの史料は年未詳であるが、日笠氏の本拠の日笠青山における合戦に関するもので、史料1・2は宗景からの感状である。宛名の日笠牛介と日笠助十郎は、日笠氏の一族であり、頼房のもとで戦ったと考えられる。残念ながら、合戦の相手や内容は不明である。史料中に「恩賞必可相計候」とあるように、まだ恩賞は与えられておらず、約束の段階に止まっている。そして、史料3の頼房の感状によって、助十郎は日笠に田畠三段を与えられているのである。この事例から、いくつかのことが考えられる。

まず、宗景の感状に具体的な恩賞地が記されていないのは、給与すべき所領が不足していたと推測されることである。同じ合戦において、竹内氏も宗景に従ったが、やはり具体的な恩賞地が明示されていない。²⁷ その仮定が正しいとするならば、日笠一族を束ねる地位にあった頼房は、自らの所領の一部を恩賞として与えざるを得なかったと考えられる。それが、史料3である。こうした恩賞地の不足は、宗景への不満が鬱積する可能性があったといえる。その点は、次節で改めて触れることとしたい。

以上、宗景の有力な同盟者というべき、岡本氏と日笠氏の事例を検討した。まず、宗景の本拠が備前国東部の天神山にあることから、遠隔地の美作国に本拠を持つ岡本氏は、美作国にあつて重要な役割を果たしたことを指摘した。特に、美作国西部は、毛利氏、尼子氏らと境を接していたため、その手腕が期待されたことであろう。逆に、日笠氏は宗景の膝元にあつたがゆえに、膝下の家臣的な役割を果たしたと推測される。その他の同盟者に関しては不明な点が多いものの、宗景から地域などによって、異なつた役割が与えられたと考えられる。

四 周辺諸勢力との関係

①宗景の知行地宛行

では、浦上宗景と周辺諸勢力との関係は、いかなるものがあつたのであろうか。その際、参考になるのは、浦上宗景の発給文書―特に知行地付与関係―であり、それらを分析することにより、可能であると考えられる。以下、中島氏と坪井氏の事例によって、考えてみたい。

A. 中島氏の場合

中島氏に知行などが付与されている史料には、次のものがある。

〔史料1〕

作州東郡以段銭之内百貫文事、令合力訖、然上者可被抽御忠儀者也、仍状如件、

天正貳

九月五日

(浦上)
宗景(花押)

中島慶介殿⁽²⁸⁾

〔史料2〕

作州高野内牧佐介一類抱分被差渡条、為替知同東郡以段銭内百貫文令合力候、同段銭使壹方方申談候訖、弥御忠儀肝要候也、仍状如件、

天正貳

九月五日

中島吉右衛門尉殿⁽²⁹⁾(浦上)
宗景 (花押)

〔史料3〕

作州広野地頭分事、為兵粮料所令合力訖、但二木於私領分正税者、可被差除、弥可被抽御忠儀事肝要候也、仍状如件、

天正弐

九月五日

中島吉右衛門尉殿⁽³⁰⁾(浦上)
宗景 (花押)

いずれも、美作国人である中島氏に関するものである。まず、史料1であるが、この史料は、宗景が中島慶介に對し、美作国東郡段錢の内百貫文を与えたものである。史料中の「美作国東郡」とは、恐らく美作国苦東郡を略称したものと考えられる。この史料によって、宗景は美作国苦東郡に段錢賦課権を有していたことが判明するのである。同様に、史料2は牧佐介一類の抱分である高野郷（岡山県津山市）の替地として、同じ苦東郡の段錢の内百貫文を中島吉右衛門尉に与えたものである。⁽³¹⁾史料中に「段錢使壹万方」とあるように、段錢使として壹万なる人物がいたことがわかる。

史料3は、広野（郷）地頭分を兵粮料所として、中島吉右衛門尉に与えたものである。宗景は、広野郷に地頭職を保持していたのであろう。広野郷は勝田郡（岡山県津山市）に所在し、高野郷とも隣接していた。それゆえ、「広野・高野郷」と一体化して表記されることもある。しかし、「但二木於私領分正税者、可被差除」とあるように、広野郷二木（私領分）の正税は除かれている。つまり、宗景は広野郷内に私領を保持しており、正税を課して

いたことが判明するのである。

史料1～3の史料を見る限り、宗景は美作国苫東郡に段銭賦課権を有し、また広野郷に私領を保持していたことがわかる。そして、徴収した段銭や兵糧料所などを国人らに与えることによって、彼らを味方へと組み込んだのである。

B・坪井氏の場合

次に、坪井氏のケースについて、考えてみたい。

〔史料1〕

竹原公用方同所岩田買地分之事、相計畢、然上者此度弥可抽奉公忠者也、仍状如件、

天正二

拾月六日

(浦上)
宗景 (花押)

坪井左介殿⁽³²⁾

〔史料2〕

今度籠城相届条、竹原庄内弥五郎名并次郎三郎名事、相計候訖、然上者弥可抽忠義者也、仍状如件、

天正三

五月九日

(浦上)
宗景 (花押)

坪井左介殿⁽³³⁾

〔史料3〕

播州小犬丸浦上將監分之事、任先判之旨、領知不可有相違者也、仍狀如件、

天正三

五月廿二日

〔浦上〕
宗景〔花押〕

坪井左介殿³⁴

坪井氏は、美作国の国人であると考えられるが、詳細は不明である。史料1に見えたとおり、坪井氏は宗景から、竹原（荘）公用分と同所の岩田という買地分が与えられている。史料2は、その約七ヶ月後のものであるが、やはり竹原荘内の弥五郎名と次郎三郎名を与えられている。特に、史料2においては、籠城戦が伴ったことが記されており、宗景は恩賞として、さらに竹原荘内に所領を準備しなければならなかったと推測される。

史料3の小犬丸とは、現在の兵庫県たつの市に所在した小犬丸保のことである。史料中に「任先判之旨」にあるとおり、かつて坪井氏が保証された小犬丸の領知が、改めて宗景により認められたことになる。史料中の「浦上將監」に関しては、畑註（4）論文がかつて敵対勢力であった浦上政宗に与した人物であり、政宗の没落によって、同地を没収されたと推測している。その可能性は、高いものと考えられる。同様に、坪井氏は来福寺分を「先判之旨」に任せて、宗景から領知を認められたこともわかっている。³⁵

宗景の私領がどこまであったかは不明であるが、恐らく竹原荘には、独自の領を形成していたと考えられる。その中には、史料1に見られるように、買地も含まれていた。そして、史料3にあるように、坪井氏がかつて領知を認められた地を安堵するとともに、闕所地を与えた可能性も高い。つまり、宗景は所領安堵の主体者になるとともに、新たに知行地を付与する存在でもあったため、中小領主を束ねる盟主となりえたのである。

このように、宗景は（1）自己所領、買地、（2）郡内に賦課した段錢、（3）闕所地、（4）既に保証された知行の

安堵によって、領主層との連携を進めていったのである。

②知行地宛行の実態

①で触れたケースに加え、宗景の発給文書には「条々」の文言ではじまる知行地の宛行がいくつか見られる。ここでは、その内容について、検討を行なうこととしたい。

A. 渋谷氏の場合

最初に、美作国河会荘を本拠とした渋谷氏のケースを考えてみたい。

条々

- 一河会庄内渋谷庶子・惣領分事、
- 一河田内宮分之事、地利相加也、
- 一吉岡庄内田所分事、
- 一小吉野庄内有元庶子分事、
- 一植月庄内渋谷分之事、
- 一勝賀茂内本所守護名事、
- 一新野庄内千代榊分之事、
- 一北賀茂庄内四名分之事、

以上

右由緒之旨候条、令扶持畢、然上者弥可被抽忠節者也、仍状如件、

(天正二年カ)
七月五日

(浦上)
宗景 (花押影)

渋谷長右衛門尉殿³⁶⁾

渋谷氏はもと相模国渋谷荘を本拠とし、後に宝治合戦での勲功により、薩摩国入来院を与えられた。そして、美作国河会荘も鎌倉期以来、領していた地である。この史料の末尾に「由緒之旨」とあるとおり、書上げられた荘園などは渋谷氏が古くから領していたものであった。特に、冒頭の「河会庄内渋谷庶子・惣領分」は、その象徴といえるであろう。つまり、渋谷氏は美作国東部に集中的に所領を保持しており、宗景はそれを一括して安堵したといってもよい。ただし、「吉岡庄内田所分」は、備前国に所在し、様相を異にしている。

備前国吉岡荘は、現在の岡山県岡山市に所在し、ちょうど吉井川にも面している。永正十六年(一五一九)の浦上村宗判物によると、村宗は難波田次郎に対して、「吉岡庄南方田所職」を兵糧料として与えている³⁷⁾。また、元龜三年(一五七二)、宗景は馬場源丞に対して、「吉岡庄南方内田所分」を扶持している³⁸⁾。したがって、吉岡荘に関しては、浦上氏が何らかの契機に自己の所領とし、渋谷氏や馬場氏に与えることが可能であったと考えられる。渋谷氏には、古くからの所領が安堵されたが、途中で宗景から新たに知行地を与えられたことを想定できよう。

B. 馬場氏の場合

次に、馬場氏の場合を検討したい。

条々

- 一 福岡庄南方内、河本左兵衛尉当地分事、
- 一 今屋内喜介土居分事、但可為闕所矣、
- 一 笠賀郷庄分事、

一 草部郷内、宮地分之事、

已上

右此前相計訖、然上者、弥可抽奉公忠者也、仍状如件、

(天正二年九月)
拾月六日

馬場源丞殿⁽³⁹⁾

(浦上)
宗景(花押)

この史料に掲出した荘園は、すべて備前国内のものである。史料の末尾に「此前相計訖」とあるように、既に一度安堵したものと考えられる。そして、その地域は、現在の岡山市内およびその周辺に集中している。概ね、宗景が権力基盤を築いた範囲である。内訳を見ると、第一条では「福岡庄南方内、河本左兵衛尉当地分」が与えられている。河本氏は前述した佐井田荘と関わりを持った領主であり、宗景はその「当地」を与えたものと考えられる。第二条では關所(今屋内喜介土居分)が馬場氏に与えられている。したがって、宗景はこの地域における關所地処分権を有していたことがわかる。⁽⁴⁰⁾ 宗景は自己の所領を与えらるゝとともに、關所地を給与していたのである。

また、馬場氏には、買地分が与えられたことがわかつている。天正三年(一五七五)の宗景の判物によると、馬場源丞には「豆田郷内島村買得地」の公用が与えられている。⁽⁴¹⁾「島村」とは、浦上氏の家臣の一人である。その中身については、元龜四年(一五七三)に中嶋氏が馬場源丞に宛てた史料により判明する。⁽⁴²⁾この史料によると、豆田郷の島村殿買地分は、八貫文(夏四貫文・秋四貫文)で預けられていた。そして、諸公事や正税は課せられなかったと記されている。

C. 額田氏の場合

最後に検討するのは、額田氏のケースである。

条々

一鳥取庄中村之事、(付カ)討善応寺事、

一同北之事、

一同高月之事、

右三箇所、当給人可被除之、

一石生郷領家分之事、但公用十貫文事、

(中略)

以上

右任父与次右衛門尉之旨、相計者也、仍状如件、

天正三 五月三日 (補上) 宗景 (花押)

額田辰千代殿⁽⁴³⁾

この史料は、額田氏に対して知行地を与えたものであるが、いくつかのことに気付く。まず、冒頭で「鳥取莊中村」など三ヶ所を与えているが、「右三箇所、当給人可被除之」という文言が添えられている。つまり、この三ヶ所については、既に給人が存在するが、その箇所を除くようにという意味であろう。史料掲出は省略したが、額田氏に与えられた牧石郷にも同様の文言が付されている。こうした文言が付された土地には、複数の給人が設定されていたと考えられる。そして、「石生郷領家分」に関しては、公用十貫文の負担が求められており、すべてが額田氏の得分ではなかった。以上の点から、中世的な複雑な土地領有のもとで、宗景が苦心慘愴して、知行地確保に努めていた様子をうかがうことができる。

A～Cの事例によって、宗景がどのようにして周辺領主に土地を給与したかを検討した。そのパターンは、以前

から領主らが保有していたものを安堵するとともに、新たに知行地を与えることもあった。繰り返さないが、その形態はさまざまであり、中には一つの土地に複数の権利が設定されたと考えられる。それは、知行地確保を望む小領主にとって不安要素であった。それゆえ、宗景は領主らとの関係を構築しながらも、必ずしも彼らと強い紐帯で結ばれた主従関係を築けなかったと推測される。その具体的な背景については、次に検討することにした。

③知行地宛行の背景

宗景は当初宇喜多氏と緩やかな連携のもとで、備前・美作に支配を展開するが、天正二年（一五七四）三月を境にして、両者の関係は決裂する。⁽⁴⁴⁾先に触れた、天正二年以降の宗景による知行地の付与は、周辺領主を味方にするための方策であったと考えてよい。しかし、このように大量に知行地を与えているのに対して、天正二年以降に宗景の与えた感状が少ないことに気付く。

実際、宗景が直家と対決した際、中核となったのは「天神山衆」と呼ばれる軍勢であった。⁽⁴⁵⁾もちろん、宗景の居城が天神山にあったため、そもそも天神山衆には違いないのであるが、その実態は先に掲出した日笠氏ら六名を主軸としたものであったと考えられる。そして、恐らく宗景に味方したのは、天神山城周辺の中小領主に限られたのではないかと推測されるのである。逆に、直家の軍勢は、「備前衆」と称されていたことを確認できる。⁽⁴⁶⁾つまり、直家は、備前一国の広範な範囲の中小領主を味方にしたものと推測される。先に見た中嶋、馬場、花房などは、宗景の敗戦後に宇喜多氏に従っている。⁽⁴⁷⁾それだけ、中小領主の勢力の動向には、流動性が認められたと考えざるをえない。

つまり、宗景は直家との対決を前に、先にあげたものの以外でも、大量に知行地を付与する文書を発給したと想定される。しかし、中世的な複雑な土地領有関係の中にあって、実態としてどこまで有効であったか疑問が残るところ

ろである。何よりも、既に給人がいる土地を与えられても、中小領主にとつては何らメリットがない。打ち続く戦乱によって、段銭徴収も極めて不安定であつたと推測され、田畠の荒れや耕作人の耕作地放棄ということも考えられる。

このような側面を見る限り、給与すべき土地が不足しており、知行地付与の宗景の判物が発給されたにもかかわらず、もはや実効性が薄れていた可能性も想定されるのである。畑註(4)論文では、宗景の権力が赤松氏の権力に依拠したものであるという。いうまでもなく、元龜・天正年間に至つては、赤松氏権力の実態というものは、無きに等しいものであつた。それでも、宗景が赤松氏の権威(権力ではなく)を頼らざるを得なかつた事實は、宗景の権力が在地に浸透しておらず、土地支配や同盟者の確保が十分に行えなかつたからと考えられる。

五 むすびにかえて

以上、家臣団(同盟者)との関係やその知行地宛行を中心にして、浦上宗景の権力構造を検討してきた。最後にまとめたいが、その前に宗景と赤松氏との関係および室町幕府―守護体制との関わりについて、まず触れておきたいと思う。この点を指摘したのは、冒頭で触れたとおり畑註(4)論文である。畑によると、宗景権力は次の段階を踏まえたとして理解できよう。

①宗景は守護赤松氏権力の代行者・保護者として、赤松氏旧領国の実質的掌握を狙つた。

②①は、室町幕府―守護体制の規定を受けつつも、宗景が大名権力としての自立を志向したことを示す。

③天文末年から永禄初年にかけて、対尼子―浦上政宗に対抗するため毛利氏と組むが、やがて毛利氏領国に包摂されることを嫌い離反した。

その主張は、概ね以上三点に集約することができる。この点について、畑も検討している素材をもとに、改めて

考えてみたい。

まず、永禄三・四年（一五六〇・一五六一）に比定される十二月二十七日仁如集堯・継之景俊連署書状案には、普伝という者が「邪法」により、宗景とともに備前国における禪宗寺院・僧侶を破滅に追い込んだという⁽⁴⁸⁾。そこで、仁如らは幕府へことの次第を訴えて「御下知」を得、毛利元就・隆元父子にその解決を依頼しているのである。そして、仁如らは「御分国」であることを理由として、普伝を退けるように、赤松性熙（晴政）にも依頼しているのである⁽⁴⁹⁾。

その結果、元就・隆元父子が宗景に申し聞かせ、普伝を退けることに成功した⁽⁵⁰⁾。畑註（4）論文が指摘するように、赤松氏でなく毛利氏が宗景に申し聞かせたのは、赤松氏が備前国に何ら実質的な支配権を持たなかったからである。なお、永禄五年（一五六二）には赤松性熙（晴政）が毛利氏に接近した事実を確認することができ、その弱体振りをうかがうことができる⁽⁵¹⁾。つまり、赤松氏が持っていたのは実効支配を伴う「権力」ではなく、旧来から備前国を支配してきた守護としての「権威」であつたと解することができる。

次に、宗景が恩賞を与える際には、「上聞」（＝赤松氏）を遂げる必要があつたこと、そして宗景の家臣岡本氏が赤松満政（則房）から感状をもらったという指摘は重要である⁽⁵²⁾。つまり、宗景は有力者との協力を得ることにより、命脈を保っていたといえる。この時期、赤松氏は晴政が子息義祐に追われ、龍野城主赤松政秀に庇護されていた。そして、政秀もまた晴政を擁することによって、権力を拡大する志向を持っていたと考えられる。形式的ではあるが、その権威は未だ残っていたのであろう。しかし、畑は赤松氏の「権力」に重点を置くものの、その実態は「権力」ではなく、守護家という「権威」というほうがふさわしい。さらに、当該期における室町幕府は著しく凋落の様相を呈しており、これが室町幕府―守護体制という枠組みの中で実現したものかは、疑問が残る。

以降における宗景の行動は、さまざまな勢力との同盟と離反との繰り返しであった。永禄末年頃には、毛利氏と

決別し、織田信長とも交戦しているのである。⁽⁵³⁾ その間、一度は同盟関係を破棄した宇喜多直家と手を取り直すなどしている。元龜三年（一五七二）十月には、毛利氏と浦上氏らとの和平案が上るが、毛利氏は「浦上・宇喜多毎事表裏之儀候」とあるように、決して宗景らに信賴を置いていなかった。⁽⁵⁴⁾ そのような状況下で、信長との和睦後の天正元年（一五七三）、信長から「播備作之朱印、宗景江被仰出」されたという。⁽⁵⁵⁾

この「播備作之朱印」とは、赤松氏の旧領国である「播磨・備前・美作」の支配権を与えるとの意に解されよう。しかも、宗景は「朱印之礼」を「過分」に請求されているのである。合戦と和平を繰り返す三ヶ国において、この三ヶ国の朱印に効果があったか不明である。しかし、宗景が上位権力にすがるうとした意図は、十分に斟酌することができるといえる。ある意味で少なくとも備前国支配は極めて流動的であり、中小領主の動向に左右されたといってもよいのである。そこで必要なのが、上位者との関わりであった。

今まで述べてきたように、宗景権力の本質は中小領主の同盟であり、宗景はその盟主にしか過ぎなかった。それゆえに、家臣もごく一部の者を除けば、強固な主従関係の下に従えたものではない。したがって、盟主として中小領主との信賴関係を築くには、その共同利益（地域防衛、経済的基盤など）を守るしかなかった。宗景が赤松氏、毛利氏、織田氏など、次々と上位者を選んだのは、その時々的情勢によるものであり、領主間の紐帯を強くする手段でもあった。

天正二年（一五七四）三月以降、宗景は宇喜多直家と決定的に決別し、備前・美作国における盟主の座を賭けて戦った。本論で見た天正二年以降、宗景によって大量発給された知行宛行は、中小領主層を自陣に引き寄せる方策であったと見てよい。しかし、中世的な複雑な土地領有関係の中で、そうした所領給与がどこまで実効性を持ったか疑問であることは、既に見てきたとおりである。そうした中で、「天神山衆」という限定的な地域に限定された宗景の勢力は、敗北に追い込まれたといっても過言ではない。そのような宗景をもって、従来いわれたような大名

権力あるいは大名領国を形成したとは言い難く、一時的に中小領主層の盟主として地域的集権体制を築いたとしか言えないのである。⁽³⁶⁾

註

- (1) 宇喜多氏・浦上氏の研究論文に関しては、拙編「赤松氏文獻目録稿」(『年報赤松氏研究』二・三三三、二〇〇九・二〇一〇)を参照。
- (2) 小林基伸「浦上則宗論」(矢田俊文編『戦国期の権力と文書』高志書院、二〇〇四)、渡辺真守「室町後期守護被官層の研究」(『室町・戦国期畠山家・赤松家発給文書の帰納的研究』新潟大学人文学部矢田俊文研究室、二〇〇三)、水野恭一郎「赤松被官浦上氏についての一考察——浦上則宗を中心に——」(同『武家時代の政治と文化』創元社、一九七五)。水野論文の初出は、『史料』五四巻五号(一九七一)。
- (3) 畑和良「浦上村宗と守護権力」(『岡山地方史研究』一〇八号、二〇〇六)、水野恭一郎「守護代浦上村宗とその周辺」(同『武家社会の歴史像』国書刊行会、一九八三)。水野論文の原題・初出は、「守護代浦上村宗考」(『鷹陵史学』三・四号、一九七七)。
- (4) 畑和良「浦上宗景権力の形成過程」(『岡山地方史研究』一〇〇号、二〇〇三)、寺尾克成「浦上宗景考——宇喜多氏研究の前提——」(『國學院雑誌』九二巻二号、一九九二)。なお、畑論文には、「浦上宗景発給文書一覧」
- (5) 「表」が付されており参考になる。
なお、便宜的に家臣団という言葉を使用しているが、随所で指摘するように、同盟者という言葉の方がふさわしいと思う。
- (6) 「備前軍記」(『古備群書集成』三巻)。浦上氏・宇喜多氏の研究は、長らく後世の編纂物によって記述され、誤った内容も見受けられる。可能な限り、一次史料に拠るべきであろう。なお、三宅克広「中世文書と近世の編纂物——岡山の戦国史研究の現状と課題——」(『法政史学』五八号、二〇〇二)を参照。
- (7) 永禄十一年六月一日延原景能等連署状(「来住家文書」六号『岡山県古文書集』第四輯)。
- (8) 「陸涼軒日録」長享二年九月十六日条を参照。畑註(4)論文の指摘による。『相生市史』第五巻には、「天神山城主浦上宗景武鑑」(岡山大学附属図書館所蔵)により、大田原氏が和気郡本庄村・藤野村、邑久郡磯上村、赤穂郡中矢野村・東有年・高田村を知行していたことを記している。しかし、同書が指摘するように、浦上氏の時代に石高制が整備されていること自体が矛盾しており、正確なものではないと考えられる。
- (9) 年末詳八月二十三日上月満秀書状(「上月文書」七七

号『兵庫県史』史料編中世九。

- (10) 元龜二年六月十九日明石行雅等連署書状写（『海老名文書（京都大学文学部古文書室所蔵）』一〇号『兵庫県史』史料編中世三）。

- (11) （元龜二年カ）七月九日浦上宗景書状（『上月文書』八二号『兵庫県史』史料編中世九）には、奏者として「小嶋左馬允」とある。なお、備前国児島と音が通じていることから、同地を本拠とした可能性があることも指摘しておきたい。

- (12) 註(8)史料参照。龍野城を攻撃した件については、（永禄十二年）□月二十三日浦上宗景書状写（『池田家文書』八九号—一二『岡山県古文書集』第四輯）を参照。

- (13) 年末詳八月六日浦上宗景内書写（『美作国諸家感状記』『久世町史』第一巻・編年資料、二二—二一号）。

- (14) 年末詳八月六日岡本氏秀副状写（『美作国諸家感状記』『久世町史』第一巻・編年資料、二二—二一号）。

- (15) 天正二年九月十一日浦上宗景判物写、天正二年十月二十一日浦上宗景判物写（『美作古簡集』『大日本史料』第十編之二十四）。

- (16) 元龜二年十二月二十六日浦上宗景書状（『石見牧家文書』一九号『広島大学文学部紀要』五五巻特輯号二、一九九五）。

- (17) （元龜二年）十二月二十八日原田豊佐書状（『石見牧家文書』六三号『広島大学文学部紀要』五五巻特輯号二、一九九五）。

- (18) 年末詳正月二十五日検校掌清書状写（『大日本古文書

石清水文書之一』二六四号）。

- (19) 年末詳五月十八日山上執行連署書状写（『大日本古文書』石清水文書之一』二六五号）。

- (20) （永禄四年カ）十一月六日日笠頼房書状（『大日本古文書』石清水文書之一』二六九号）。なお、『大日本古文書』石清水文書之一』の佐井田莊閑係史料では、「日笠」を「目笠」としているが、「目笠」が正しい。

- (21) 年末詳十一月晦日河本太郎次郎書状（『大日本古文書』石清水文書之一』二七〇号）。なお、河本氏に關しても不明な点が多々あるが、現在の岡山県赤磐市河本に本拠を構えた領主であったと考えられる。この史料には、「家」という署名と花押があるものの、正確な実名は不明である。

- (22) 年末詳十一月十八日日笠頼房書状（『大日本古文書』石清水文書之一』二七一号）。

- (23) 年末詳十一月五日河本太郎次郎書状（『大日本古文書』石清水文書之一』二七二号）。

- (24) 年末詳四月十四日浦上宗景感状写（『日笠村神職近藤左近大夫所蔵』一号『黄微古簡集』）。なお、以下の二・三号文書も含め、『久世町史』第一巻・編年資料では、「天正三年カ」としている。その推測が正しければ、宇喜多直家との交戦時のものとなる。

- (25) 年末詳四月十四日浦上宗景感状写（『日笠村神職近藤左近大夫所蔵』二号『黄微古簡集』）。

- (26) 年末詳四月十五日日笠頼房感状写（『日笠村神職近藤左近大夫所蔵』三号『黄微古簡集』）。

- (27) 年未詳四月十四日浦上宗景感状写（「磐梨郡土生村」二号『黄微古簡集』）。
- (28) 天正二年九月五日浦上宗景判物（「中島文書」一号『岡山県史』第二〇巻・家分け史料）。
- (29) 天正二年九月五日浦上宗景判物（「亀山家文書」三号『倉敷の歴史』一二号、二〇〇二）。
- (30) 天正二年九月五日浦上宗景判物（「亀山家文書」四号『倉敷の歴史』一二号、二〇〇二）。
- (31) 牧氏も、美作国人の一人である。永禄九年（一五六六）に推定される八月十九日浦上宗景感状（「牧家文書」四号『岡山県古文書集』第三輯）では、佐良表の合戦での戦功に対して、牧佐介に恩賞を与えることが約束されている。そして、宛名を欠いているが、永禄九年十一月十日浦上宗景判物では、高野郷代官職が預け置かれている。宛名は、恐らく牧佐介であると考えられる。つまり、宗景は牧佐介に高野郷代官職を預け置いたため、中島氏には替地を準備しなくてはならなかったと考えられる。
- (32) 天正二年十月六日浦上宗景判物（「坪井文書」『久世町史』第一巻・編年資料、五九二号）。
- (33) 天正三年五月九日浦上宗景判物（「坪井文書」『久世町史』第一巻・編年資料、六三三号）。
- (34) 天正三年五月二十二日浦上宗景判物（「坪井文書」『久世町史』第一巻・編年資料、六三八号）。
- (35) 天正三年五月二十二日浦上宗景判物（「坪井文書」『久世町史』第一巻・編年資料、六三九号）。
- (36) 天正二年九月五日浦上宗景判物写（「黄微古簡集」『久世町史』第一巻・編年資料、五八〇号）。
- (37) 永正十六年十二月十六日浦上村宗判物（「難波文書」七号『岡山県史』第二〇巻・家分け史料）。
- (38) 元亀三年十二月二十三日浦上宗景判物写（「西大寺村中村万次郎所蔵」三号『黄微古簡集』）。
- (39) 天正二年十月六日浦上宗景判物（「青江文次氏所蔵文書」『久世町史』第一巻・編年資料、五九一号）。
- (40) 年未詳九月二十一日浦上宗景判物写（「西大寺村中村万次郎所蔵」八号『黄微古簡集』）では、史料中に「右此旨為闕所相計候」とあるように、中村弥八郎跡職以下を与えられている。また、花房与三左衛門も鳥取荘内「未延名、弥畠名」を闕所として与えられている（天正二年十月二十三日浦上宗景判物写「西大寺村中村万次郎所蔵」三号『黄微古簡集』）。
- (41) 天正三年五月十七日浦上宗景判物（「青江文次氏所蔵文書」『久世町史』第一巻・編年資料、六三六号）。
- (42) 元亀四年三月二十三日中嶋行書状写（「西大寺村中村万次郎所蔵」二号『黄微古簡集』）。
- (43) 天正三年五月十七日浦上宗景判物写（「額田文書」『久世町史』第一巻・編年資料、六二九号）。
- (44) 天正二年三月十三日宇喜多直家起請文（「肥後原田文書」『久世町史』第一巻・編年資料、五六七号）。なお、宇喜多氏と浦上氏の対立に関しては、註（4）に掲出した寺尾・畑論文のほか、しらが康義「戦国豊臣期大名宇喜多氏の成立と崩壊」（『岡山県史研究』六号、一九八四）、久保健一郎「境目」の領主と「公儀」（『岡山藩研究会

編『藩世界の意識と関係』岩田書院、二〇〇〇）などを参照。

- (45) 天正三年七月十一日宇喜多直家書状写（『美作沼元文書』四号『岡山県古文書集』第三輯）などには、宗景の勢力を指して天神山衆と記されている。

- (46) （天正三年）九月十六日興了書状（『法隆寺文書』『久世町史』第一巻・編年資料、六六二号）。

- (47) 『浮田家分限帳』（『続群書類従』二十五輯上）。

- (48) 『鹿苑日録』巻二四・古文書所収。なお、普伝は日蓮宗僧侶であると考えられている（沼田頼輔『備前法華の由来』岡山歴史地理学会、一九三六）。

- (49) 『鹿苑日録』巻二四・古文書所収。

- (50) 年未詳八月十七日毛利元就・隆元連署書状（前田家育徳会尊経閣文庫編『武家手鑑』臨川書店）。

- (51) 拙稿『『新訂作陽誌』所収赤松晴政（性熙）発給文書について』（『岡山地方史研究』一〇〇号、二〇〇三）。

- (52) 年未詳浦上宗景感状（『松田文書』七号『岡山県史』（則房）書状写（九州史料刊行会編刊『九州史料叢書』第一二巻 黒田御用日記 乾・坤一九六一）

- (53) 『益田家什書』永禄十二年八月十三日条（『岡山県史』第一九巻・編年史料、二二二二号）。

- (54) （元亀三年）十月十日小早川隆景書状写（『萩藩閥閥録』『岡山県史』第一九巻・編年史料、二二五二号）。

- (55) （天正元年）十二月十二日安国寺恵瓊自筆書状（『大日本古文書 吉川家文書之一』六一〇号）。

- (56) 地域的集権体制については、拙著『中世後期山名氏の研究』（日本史料研究会、二〇〇九）、同『戦国期赤松氏の研究』（岩田書院、二〇一〇）を参照。地域的集権体制は、主として経済的基盤などを守るなど、共通利益を目的に中小領主が盟主を仰ぎ、成立したものである。盟主となる者は、守護あるいは守護代、奉公衆など一定の地位や身分を有する者が選ばれた。浦上宗景はいうまでもなく、赤松氏の下で守護代などを務めた有力者である。なお、宗景の兄政宗の権力についても、基本的に同質であったと考えている。この点に関しては、拙稿『備前国浦上政宗に関する一考察』（『ぶい&ぶい』一四号、二〇一〇）を参照。